

自尊感情を高める道徳学習の工夫

—「生命尊重」と「学校行事」の総合単元化を通して—

うるま市立伊波中学校 教諭 友寄 美奈子

I テーマ設定の理由

平成20年1月17日中央教育審議会答申の「子どもたちの現状と課題」では、日本の子どもたちの特徴として、自分に自信のある子どもが国際的に見て少ないこと、また、自己の将来や人間関係に不安を感じている子どもの増加等が課題として挙げられている。その課題解決への指導の充実として、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、それらと共に生きる自分への「自信をもたせる必要がある」とし、その手立てとして体験活動の充実を挙げている。また、その体験を単に体験しただけにとどめるのではなく、自己と対話を重ね、自分自身を深めることの重要性を述べている。

本校の生徒は、学習や生活に意欲的に取り組んでいる様子がみられる。一方で、つまづく立ち直りに時間のかかる生徒や壁にぶつくと不登校になりがちな生徒がいる。1小学校1中学校という限られた人間関係の中で、互いに切磋琢磨させ、自分を高め、いかに自信を持たせるかは、教育活動をすすめる上で重要な視点である。答申でいう「自信を持たせること」を「自尊感情を高めること」としてとらえた。

近藤卓(2010)は、自尊感情は、他者との五感を通じた共有体験で育まれるものであると述べている。その中でも自尊感情は「いのちの教育」で高められるとし、「いのちの教育」とは、人の一生のあらゆる営みと出会いを含む、総合的な教育であると定義している。学校の教育活動の中での共有体験を通して自尊感情を高める必要性があるのではないか。学校の教育活動のどの場面で自尊感情を高めることができるのかを探ることが大切だと考える。

そこで、「いのちを考えること」は学校教育の場面、とりわけ道徳学習において深めることができるのではないかと考えた。また、学校行事を通しての体験活動と道徳学習にかかわりを持たせて自尊感情を高める取り組みをしようと考えた。このように自尊感情を高めることを意図した道徳学習を効果的に行うために総合単元化することを試みる。

以上のことから、本研究では、「生命尊重」と「学校行事」の重点的に指導したい内容項目を総合単元化した道徳学習を行うことで、生徒の自尊感情が高まるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

道徳学習の総合単元化を通して道徳的価値の深化を図り、道徳的実践力を高め、生徒の自尊感情が高まる道徳の授業を研究する。

III 研究仮説

1 基本仮説

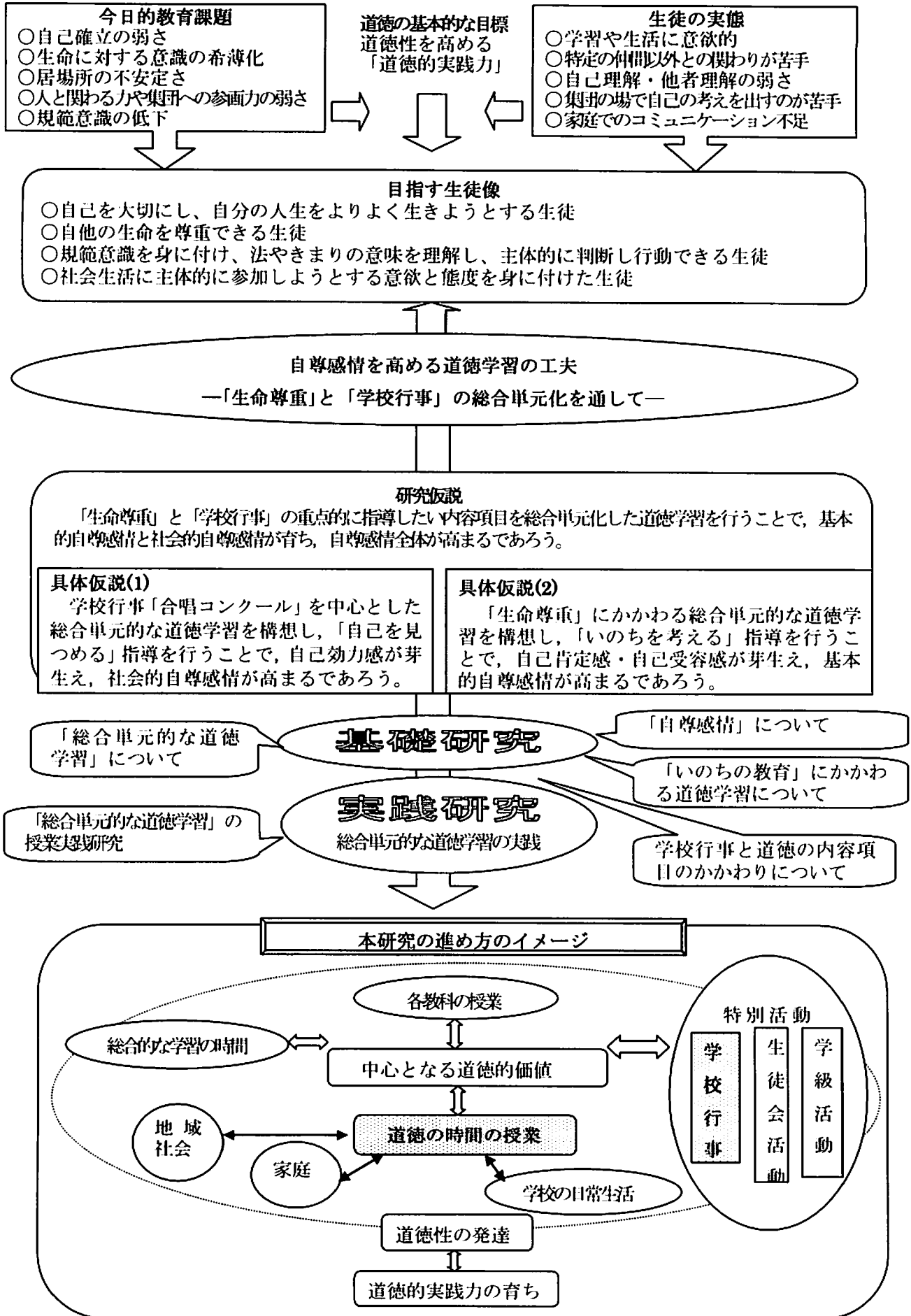
「生命尊重」と「学校行事」の重点的に指導したい内容項目を総合単元化した道徳学習を行うことで、基本的自尊感情と社会的自尊感情が育ち、自尊感情全体が高まるであろう。

2 具体仮説

(1) 学校行事「合唱コンクール」を中心とした総合単元的な道徳学習を構想し、「自己をみつめる」指導を行うことで、自己効力感が芽生え、社会的自尊感情が高まるであろう。

(2) 「生命尊重」にかかわる総合単元的な道徳学習を構想し、「いのちを考える」指導を行うことで、自己肯定感・自己受容感が芽生え、基本的自尊感情が高まるであろう。

IV 研究の全体構想図



V 研究内容

1 総合単元的な道德学習

(1) 総合単元的な道德学習とは

押谷由夫(1995)は、『総合単元的道德学習論の提唱』において、総合単元的な道德学習について以下のように述べている。

総合単元的な道德学習とは、道德の時間の目標、役割をそのままにし、その前後で子どもたちが主体的に関わる道德学習を計画し、それらの一連の過程を道德学習と考え、子どもたちが主体的に学習をしていけるための支援の在り方を考えていくことである。

つまり、道德の時間を要として、子どもを主体とした道德学習が発展的に展開されるようにしていくことが、総合単元的な道德学習といえる。例えば、道德的価値についての問題意識や課題意識を各自が主体的に耕す学習を意図的に行ったのちに、道德の時間において、道德的価値の自覚を深める授業を行う。そのことによって、各自の問題意識や課題意識の追究がより主体的になされることになる。また、道德の時間のあとに、各自が自己課題とした事柄について、より主体的に追究していける場を設けることによって、そのあとの学習がより子どもを主体とした道德学習として発展していく。すなわち、子どもの道德学習を大きなプロセスで考え、その中に道德の時間の固有の学習を位置づけていくことが大切である。

(2) 総合単元的な道德学習のねらい

総合単元的な道德学習でねらうものとして次の三点があげられる。

- ① 子どもを主体とした道德学習の確立
- ② 各教科等における道德教育のいっそうの推進
- ③ 道德的実践力の多面的な育成

そこで、子どもの道德学習の場を全体的に押さえて多様に構想する場合には、ねらいにかかわる道德性の育成がどのような場で行われるのかを、全体にわたって把握しておくことが必要である。(p 2「全体構想図の『本研究の進め方のイメージ』」参照)

例えば、道德の時間における学習は「狭義の道德学習」ととらえることができる。さらに、各教科や特別活動での学習、学校での日常生活(生活環境を含む)を通しての学習、家庭での学習、地域社会での学習などが考えられる。それらを「一般的な道德学習」ととらえることができる。それらは、それぞれの場における子どもたちの学習活動の中でおのずとなされる道德学習であり、子どもたちがあまり意識していない場合も多い。

このような道德学習を支援する教師は、道德の時間を中核として、それぞれの場における道德学習と関連をもたせながら、総合的に道德学習が進められるように支援していくことが求められる。それらを計画するのが総合単元的な道德学習ということになる。

(3) 総合単元的な道德学習のよさ

押谷(1995)は、総合単元的な道德学習に取り組んでいくことによって、子どもの側に同時に教師の側に、右のようなよさがあると考えた。

その中でも、本研究においては、特に②と⑥をねらいとした。

- ①子どもが自ら判断し行動するようになる
- ②子どもが自分のよさや自分自身の課題に気づく
- ③子ども自ら願いを高めていく
- ④子どものくらしや教科の学習と道德の時間がつながる
- ⑤一人一人に応じたかわりが工夫しやすくなる
- ⑥学級が集団として高まる

(総合単元的な道德学習のよさ)

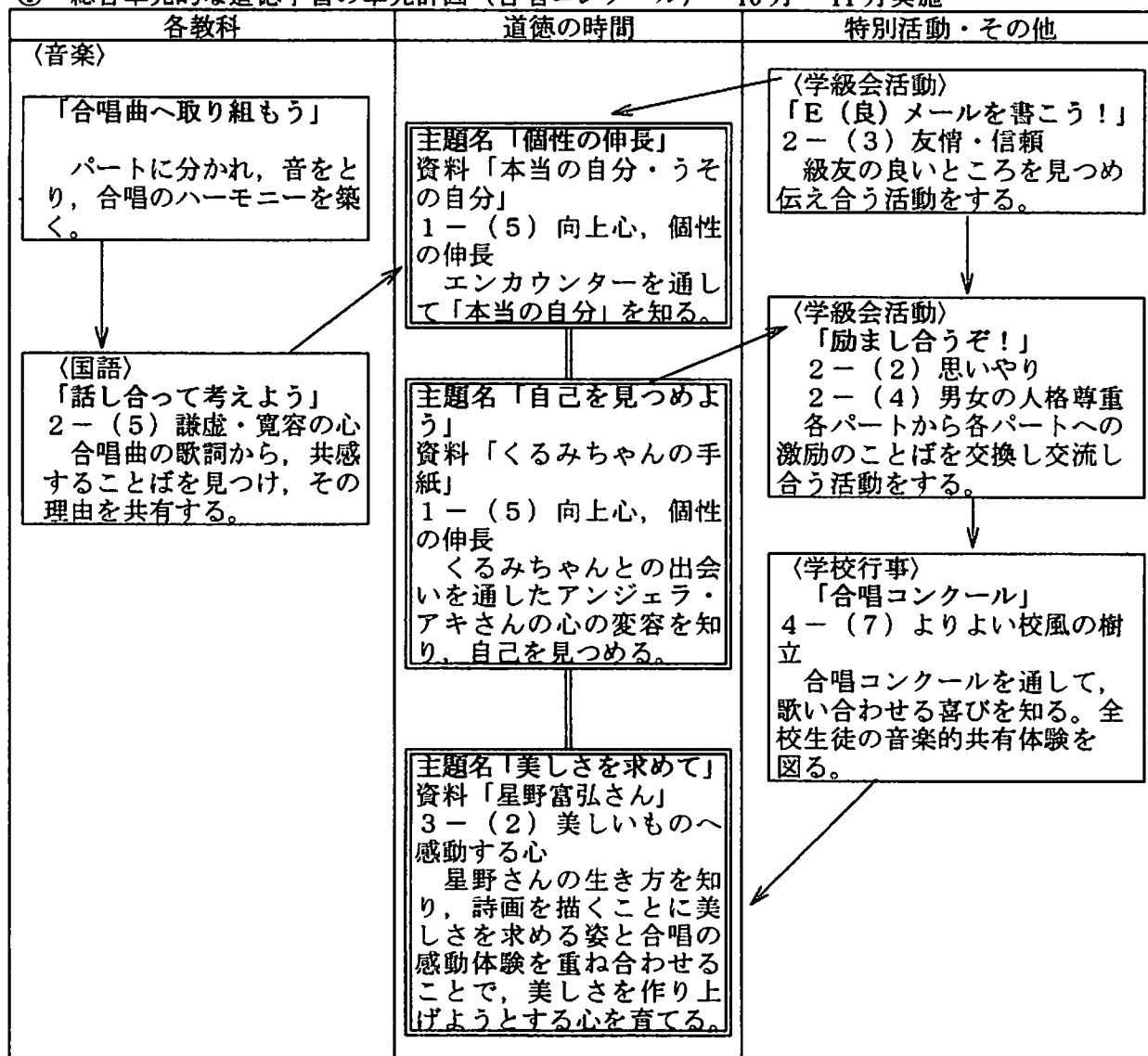
(4) 中学校での実施における留意点

中学校において計画する場合には、教科担任制をとっていることが大きな制約になるが、担任の教師が担当する教科、特別活動、道徳の時間、日常的な指導とうまく関連されていくことを主として考えていく必要があると押谷は述べている。また、各教科との関連において特に留意すべきことは、どちらかの学習を一つの学習の中に取り入れてしまうのではなく、どちらの学習においても、関連を図ることでそれぞれの目標の達成がより促進されるようにするということである。各教科の学習は、教科固有の目標や内容に従って行われる。道徳の学習と関連の深い単元であっても、それは教科固有の目標に従って指導がなされる。そのことを押さえた上で、特にその中でも道徳学習と関連の深い単元や時間を、道徳の時間の学習とかかわりをもたせて計画を組むことが基本である。

(5) 本研究における総合単元的な道徳学習の単元計画の例

自尊感情を高めることをねらいとした総合単元的な道徳学習を、以下の通り計画した。

① 総合単元的な道徳学習の単元計画（合唱コンクール） 10月～11月実施



② 総合単元的な道徳学習の単元計画（「いのちの教育」） 1月～3月実施

各教科	道徳の時間	特別活動・その他
<p>〈技術〉 「作物の栽培」 3－（1）生命尊重 3－（2）自然愛護・畏の念 作物の生育環境と育成術の習得及びそれを利用した栽培・育成を行う。</p>	<p>主題名「命のもとをつくる」 資料「奇跡のリンゴ」 1－（5）向上心、個性の伸長 木村さんのリンゴを育てる姿から命をつくる者の思いを知る。</p>	<p>〈学級会活動〉 「生き方いろいろ」 （3）ア「学ぶことと働くことの意義の理解」 人生で大切にしたい価値は何かを考え、グループで交流する。</p>
<p>〈国語〉 「胸の底の人とことばたち」 3－（1）生命尊重 3－（3）生きる喜び 高村光太郎の詩から、智恵子の生と死、人が生きることとその喜びを読み取る</p>	<p>主題名「精一杯生きる」 資料「ガンとたたかった横山友美佳」 3－（1）生命尊重 横山さんの生き方を通して、生きていることのありがたさに思いを寄せ、今ある生命を精一杯生きていこうとする心情を育てる。</p>	
<p></p>	<p>主題名「命のつながりを感じる！」 資料「おへそのあな」 3－（1）生命尊重 絵本を使って、アニメーションの手法で「命」の誕生を感じる授業を行う。また、命を待つ家族の思いに触れ、家族からの手紙を読む。</p>	
<p></p>	<p>主題名「命をいただく」 資料「やぎの散歩」 3－（1）生命尊重 絵本とDVDから飼っているやぎを食べるために殺す気持ちを考え、命をいただくことを考える。</p>	<p>〈総合的な学習の時間〉 「収穫祭」 関連 3－（1）生命の尊重 技術の時間に自分達たちで育てた作物を使い、料理を作り、いただく体験活動をする。</p>

2 自尊感情

自尊感情を厳密に定義づけることは難しいが、ここでは、近藤（2010）の定義した自尊感情に依拠した形で研究をすすめ、ローゼンバーグの開発した尺度をもとに近藤が作成し直した尺度（SOBA-SET-TR）を中心に使い、検証していく。

〈自尊感情とは〉

ローゼンバーグ(1965年)

「自己受容・自己好意・自己尊敬を含む自己に対する肯定的または否定的な態度」であり、有能性・効力感とは関係するが同じではなく、優越性・完全性は含まれない概念である。とてもよい (very good)ではなく、これで十分だ(good enough)と定義した感情である。

近藤卓(2010年)

ローゼンバーグの自尊感情の定義を一步進めて、自尊感情を基本的自尊感情と社会的自尊感情の二つの領域によって形成されているものにとらえた。基本的自尊感情は「自分は生きていてよいのだ」「自分の存在には何の不安もない」といった思いであり、比較や優劣とは無縁に、理由もなく絶対的、根源的な思いとして自分はこのままでよいのだと思える、そうした感情である。この感情は、乳幼児期からの親や親に代わる養育者からの絶対的な愛と、その後の他者との共有体験の繰り返しによって、形成されるものだと考える。また、社会的自尊感情とは、他者との比較や優劣で決まってくるもので、勝ったり優れていたりすれば高まる。いわば、条件付きで相対的な感情である。この感情は、プラスの評価を受けたり、勝負に勝ったりして優越を確認すると、一気に膨らむ。逆に、勝負に負けたりすると、いっぺんでつぶれてしまうようなものである。

〈自尊感情を高める手立て〉

主に基本的自尊感情は身近な信頼できる人々との共有体験を重ねていくことで、より強固に形成されていくと述べている。

〈自尊感情を高めるときの注意点〉

社会的自尊感情は他者との比較や競争によって高められ強められるが、挫折を経験したときにしぼまないためには、根っこでその人を支える基本的自尊感情をあらかじめ高めておくことが大切であると述べている。両自尊感情のバランスをとっていくことが大切であるとも述べている。

図1 基本的自尊感情と社会的自尊感情

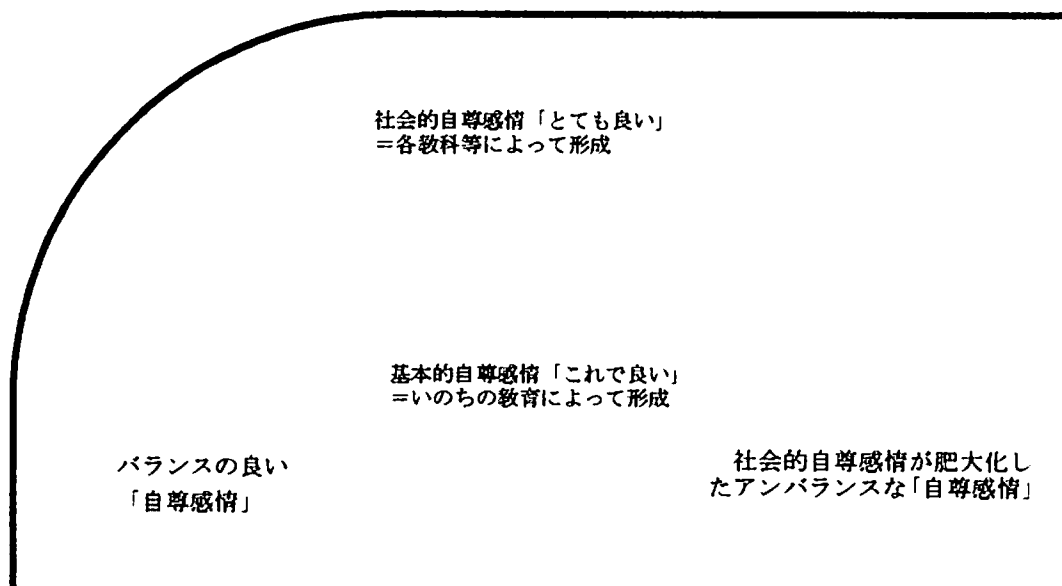


図1は、社会的自尊感情と基本的自尊感情を図示したものである。社会的自尊感情を屋根の上屋に例えると、基本的自尊感情は土台となるものである。社会的自尊感情が安定するためには、土台が強固に形成されることが大切である。自尊感情の育ちは、その人の感情の動きによって形成されていく。身近な人との共有体験を重ねていくことで、さまざまな感情が育ち、それが自尊感情を高めていく。

具体的には、社会的自尊感情は、自己効力感が高まることで育まれる。また、基本的自尊感情は自己肯定感・自己受容感が高まることで育つ。それらは、他者との共有体験を通して、その際に感情の共有がなされることが支えとなって芽生えていく感情であるととらえている。

《用語の解説》 ※主に研究にかかわることばについて

- | | | |
|---------|--------------------------------------------|----------|
| [自己肯定感] | 自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情 | 田中(2008) |
| [自己受容感] | 自分や今ここでの体験をありのままに意識化し、概念化して受け入れる態度や感情 | |
| [共有体験] | 何らかの体験を共有することであり、さらにその体験をしたときの心の動きを共有すること。 | |
| [自己効力感] | ある行為を行う際の自分の能力に対する確信 | |

3 道徳学習の総合単元化と自尊感情の育ち

道徳学習を総合単元化することによって、子どもが自分のよさや自分自身の課題に気づくことをねらうと同時に、学級が集団として高まることをねらった。その際、自尊感情を高めるための手立てとして、授業の中に共有体験を入れることにした。(図2)

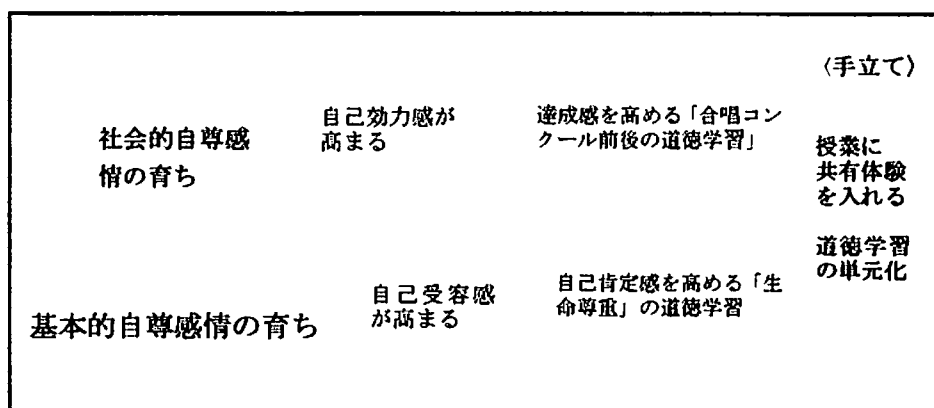


図2 自尊感情の育ちと道徳の授業でのアプローチの方法

4 道徳と学校行事のかかわり

本研究では、学校行事の中でも、「合唱コンクール」を取り上げて研究した。

以下、本校の合唱コンクールのねらい及び本研究における道徳と学校行事のかかわりをまとめた。

(合唱コンクール [(2) 文化的行事] について)

(1) 伊波中学校合唱コンクールのねらい

- ① 歌い合わせる喜びや共通の音楽的感動体験をさせるとともに、進んで音楽活動をしようとする態度を育てる。
- ② 音楽表現・鑑賞の能力（ステージマナー・聞く態度）を養う。
- ③ 学級において生徒と教師が一体となってハーモニーを作り上げる中で学級の団結を図り明るい学級作りを目指す。

(2) 合唱コンクールを通して生まれる団結

- ・ 練習過程の中で個人の努力が見えやすい。歌っていない人がいると、不平不満が生じ、それが対立点となり、学級の大きな問題として取り上げられやすい。(学級課題の表面化)
- ・ 学校行事の中では、体育的行事等(校内陸上等)にも合唱コンクールのような競争的要素はあるが、体育的行事では、個人種目等があり、意識が学級から個に分散することもある。その点、合唱では、個人の意識が学級全体に集まる。

(3) 合唱コンクールにおける道徳的価値と生徒の心の変容について

合唱コンクールを通して、生徒の心に生じる感情は取り組みの過程でさまざまに揺れるが、歌う恥ずかしさを自己を見つめて乗り越え[内容項目1-(5)]、歌う価値付けを自己の中にある美しさを求める心を育てることで高めていく[内容項目3-(2)]。その結果として、一人ひとりの向上心が育ち、美しいハーモニーが生まれ、取り組みがすべて共有体験となる。行事を終えたときに感じる達成感は、自己効力感につながり、自己効力感が高まることで、社会的自尊感情が高まると考えられる。

(4) 合唱コンクールの取組の中で育てたい心の変容と道徳の4つの視点とのかかわり

学習指導要領では、道徳教育の目標を達成するために指導すべき4つの視点を挙げている。その道徳の視点と合唱コンクールの取組の過程で育てたい心の変容とのかかわりを以下の表にまとめた。

表1 道徳の4つの視点と合唱コンクールの取組における心の変容

視点	心の変容	合唱の取組として
1	自己の達成感	自分が歌詞で共感したメッセージを届けたことや「自分が歌うこと」の大切さの実感(一人でも歌わないと成立しないことの実感とも言い換えられる。)
2	男女で協力したこと の喜び	取組初めの男生徒と女生徒の意識の違いを乗り越えて、お互いに協力したことへの満足感。
3	美しさを求める心 の育ち	歌うとはどういうことだろうと考え続けハーモニーの完成を求めた歌は聴衆へ「美しさ」を届けること、その「美しさ」が感動へつながることの実感。 美しい歌を届けたことで感じる「生きている」ことの素晴らしさを感じる心。
4	学級の連帯感・愛 校心の育ち	コンクール当日、歌いきった中で育つ学級の連帯感。 また、コンクールの中で聞いた他学級、他学年の合唱を通して、賞を目指して切磋琢磨することで育つ愛校心。

(5) 合唱コンクールの取り組みと道徳の内容とのかかわり

合唱コンクールに向けた取り組みの過程における予想される生徒の姿と道徳の指導内容とのかかわりを以下の表にまとめた。

表2 合唱コンクールの取組・予想される生徒の姿と道徳授業とのかかわり

月	合唱の取組	生徒の姿	取組時間	主な指導内容・ねらい	手立て等
7	曲選定	○学級通信の発行を定期的に行うこと	音楽の時間	1年生にふさわしい曲	<ul style="list-style-type: none"> ・前もって曲選びの重要性を説諭 ・伴奏者候補へ激励のことばかけ
	曲決定		音楽の時間	自分達の納得のいく曲	
9	伴奏者候補練習開始(夏休み)	<p>合唱を楽しみにする生徒がいる反面、乗り気でない生徒もいる。歌詞の思いを伝えたい気持ち！</p>	国語の時間	<p>「歌詞」のメッセージを受け取る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりが歌詞の良さに気付く(自己の伝えたいことばを持つ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の良さのグループカード教室掲示
	10		合唱自主練習スタート	音楽の時間	
放課後学級活動		<ul style="list-style-type: none"> ・パートごとの練習 ・「良(E)メールを書こう!」 ・級友の良いところを見つめ伝え合う活動。 2(オ) 		<ul style="list-style-type: none"> ・総合単元として「自己について考える」ことを「道徳の時間」を中心に実施開始。 ・他校の合唱の練習風景をDVDで視聴。 	
11		<p>意見の「対立」や感情のもつれが想定される。</p> <p>↓</p> <p>合唱練習の取組の変容が見られてくる。</p> <p>熱心で自主的に練習する姿</p> <p>直前まで練習する姿</p> <p>舞台上で一生懸命歌う姿</p>	道徳の時間		<p>「本当の自分・うその自分」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エンカウンターを通して「本当の自分」の自己開示を図る。 <p>【内容項目1-(5)】</p>
			道徳の時間	<p>「くるみちゃんの手紙」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンジェラ・アキの変容から自己を見つめる。 <p>【内容項目1-(5)】</p>	
			学級活動	<p>「お互いを励まし合おう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各パートへの思いや激励のメッセージを交換し交流しあう活動をする。 <p>【(2)エ, (2)オ】</p>	
			学校行事	合唱コンクールを通して歌い合わせる喜びや音楽的感動体験の共有	
			道徳の時間	<p>「美しさを求めて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・星野富弘さんの生き方を知り、詩画を描くことに美しさを求める姿と合唱の感動体験を重ね合わせることで、美しさを作り上げようとする心情を育てる。 <p>【内容項目3-(2)】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①コンクールの翌日、合唱コンクールの感想を書かせる。 ②保護者や先生方に感想の手紙を依頼しておく。 <p>(①②を授業で紹介)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者や先生方からの賞賛の手紙を授業で紹介後、教室に掲示

5 「いのちの教育」

近藤(2007)は、いのちの教育の目的は「自分のいのちはかけがえなく大切なもので、自分は無条件に生きていいのだ、と子ども自身が確認できるようにすること」と述べている。子ども自身が自分自身を無条件に受け入れられるとき、そこには基本的自尊感情と呼ぶべき心の働きが機能していると考えられる。

基本的自尊感情とは「基本的、無条件に自分を大切に思え、自身を尊重する感情」であり、「いのちの教育は基本的自尊感情を育む教育である」と定義することができる。

また、いのちの教育の方法を一言で言えば「共有体験」となる。「共有体験」とは、「何らかの体験を共有し、さらにその体験したときの心の動きを共有すること」であると述べている。つまり、「体験の共有」と「感情の共有」が共有体験の構成要素ということになる。

(1) 「いのち」とは何か

「いのち」は命や生命より広い概念として、「いのち」の語を用いることにする。その理由は、「命」や「生命」とした場合には、身体的な生と死に視点が限定されてしまうと考えるからである。

近藤(2005)の調査によれば、「いのち」は三つのグループに分けることができる。

第一グループ (希少性)	「限りあるもの」「親からもらったもの」「大事なもの」
第二グループ (関係性)	「結婚」「性 (sex)」「生き方 (生活)」
第三グループ (必然性)	「葬式」「がん」「死」

つまり、奇跡的で「希少」な存在としてのいのちが生まれ、多くのいのちと出会い互いに「関係」を結び、やがて「必然」としての死を迎える。そうした誕生から死までの、あらゆる人のいとなみがいのちなのだ、としている。つまり、「いのちの教育」とは、人の一生のあらゆる営みと出会いを含む、総合的な教育であると定義している。

(2) 「いのち」と道徳の内容項目にみるキーワード

永田繁雄(2006)は、生命の尊重そのものが道徳性全体の基盤的な価値であり、全ての内容項目と関連があるといえるとした。その中でも、「いのち」は道徳の内容のⅢの視点「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」が中核となる。その内容項目において、広く呼称されている言葉を手がかりとするならば下表のようなキーワードで押さえることができる。また、他の視点の中で、特に「いのち」の角度から欠かせないものをあわせて示す。

(※表中の下線部は、本研究で取り上げた項目である・・・関連価値も含む。)

Ⅲの視点の内容項目にみるキーワード	他の視点の内容で主に関わるもの
<u>生命の尊重</u> <u>生きることの喜び</u>	健康・安全 高齢者への感謝
動植物愛護 自然愛 環境保全	公正・公平 権利と義務 <u>家族愛</u>
畏敬の念 <u>美しさへの感動</u> など	人類愛 など

(3) 本研究における「いのちの教育」

本研究では、「いのちの教育」を道徳の内容項目3-(1)とかかわりを持たせて取り組むこととし、主に道徳の時間において「いのちの教育」を以下のように位置づけ実践する。

第一グループ (希少性)	道徳「いのちのつながり」
第二グループ (関係性)	道徳「美しさを求めて」
第三グループ (必然性)	道徳「精一杯生きる」

また、本研究では、共有体験を図る手立てとして、学習活動の中にペア学習やグループ学習を取り入れ、感情の共有化を図っていく。

VI 指導の実際

1 研究仮説の検証

具体仮説(1)の検証のために、「学校行事」の総合単元化の中で道徳の授業を3回実施した。具体仮説(2)の検証には、「生命尊重」にかかわる道徳の授業を2回行った。以下、その結果を踏まえて検証する。

2 具体仮説(1)の検証

学校行事「合唱コンクール」を中心とした総合単元的な道徳学習を構想し、「自己をみつめる」指導を行うことで、自己効力感が芽生え、社会的自尊感情が高まるであろう。

(1) 検証授業の実施

実践事例①「道徳」の授業実践1 [11月1日(月)5校時実施]

ア 主題名 「自己を見つめよう」 内容項目1-(5)

イ 資料名 「くるみちゃんの手紙(コンクール前)」

「くるみちゃんの手紙(コンクール後)」

DVD 「全国学校音楽コンクールスペシャル『続・拝啓十五の君へ』」

[2009.10.6 放送 NHK制作・友寄編集版]

ウ 本時の学習

・本時のねらい

同世代の中学生の変容を知り、自己を見つめ、よりよく生きたいという思いを育てる。

・授業仮説

資料中の主人公の言葉を知る場面において、DVD視聴をすることによって、自己を見つめ、向上する意欲を持つであろう。

エ 生徒の感想・・・キーワードで分類した。

(「自己を見つめた姿」にかかわる記述があるか。)

- ・自分と向き合うこと(4名)
- ・自分は変わる(5名)
- ・自分を信じる(3名)
- ・自分の悩みを肯定的に受け止めたい(4名)
- ・資料の人物や資料の中の歌が素晴らしい(5名)
- ・授業が楽しかった等の授業についての感想(10名)

上記の感想の中から「自己を見つめた姿」にかかわる記述が見られた生徒感想を以下に載せる。(原文のまま)

※下線部は研究員による表記

- a ワークシートに自分が本当におもっている事や、なやんでいる事が、かけた気がする。
- b 悩みなんかないと思っていたけど、自分と向き合ってみることで、悩みや他の自分の面が分かったような気がする。
- c いろいろな悩みと向き合っていけばいいと分かった。
- d 自分と向き合っていこうと思った。
- e 今日の授業で、私も考え方を考えてみようと思った。
- f 自分の悩みをとにかく解決できるようにしようと思っている。
- g DVDとか見たりして、つらいことがあっても顔を上げて一歩ずつ自分の声を信じて歩いていきたいと思った。

【考察①】

生徒の感想は、自己を見つめた姿が見られた。その中でも、上記の a～g の感想は、自己効力感が表れたものだと考えた。自己効力感とは、「ある行為を行う際の自分の能力に対する確信」である。この概念を生徒の感想に照らしてみると、a の生徒は「自分が本当に思っている事を書けた」とし、書けたことで「自分と向き合えた」ととらえた。同じく授業の感想を「向き合う」ととらえた生徒は b, c, d となる。

また、生徒 e は「私も考え方を変えてみよう」と述べ、「自分は考え方を考えることができる」と自分の能力をとらえたと考える。同じく f の感想の「解決できるようにしよう」は、「自分は解決する能力を持つ」と自己の能力に対する確信を持つきっかけを授業を通して得たのだと考え、これも「変わる事」にかかわる感想となる。

さらに、g の「自分の声を信じる」ことは自己を見つめるとともに、自分を信じる能力だととらえた。

このように、自己効力感にかかわる感想が出てきたことで、「自己をみつめる」指導を行うことは、有効であったと考える。

実践事例②「道徳」の授業実践2 [11月16日(火)3校時実施]

ア 主題名 「美しさを求めて」 内容項目 3-(2)

イ 資料名 「花に寄せて」(中学道徳 明日をひらく 東京書籍)

DVD 「NHKスペシャル やさしさに会えるふるさと『画家・星野富弘の世界』(1993.10.30 放送) 友寄編集版」

ウ 本時の学習

・本時のねらい

資料中の主人公の境遇や生き方を知り、詩画を描くことに美しさを求める姿と合唱の感動体験を重ね合わせることで、美しさを作り上げようとする心情を育てる。

・授業仮説

周りの人が学級にあてたメッセージを聞く場面において、合唱で得た新しいものを考えまとめる活動を通して、合唱の感動体験を再確認できるであろう。

・評価・・・ワークシートの感想の中に、「美しさを求める心情」にかかわる記述があるか。

エ 生徒の感想・・・キーワードで分類した。

(「自己を見つめた姿」にかかわる記述があるかか。)

- ・人に「感動を与えることができる」ととらえた記述 (7名)
- ・「協力すること・団結することで気づくことができる」にかかわる記述 (5名)
- ・「一生懸命やることの大切さ」にかかわる記述 (5名)
- ・「合唱」と「資料の『絵』は共通している」にかかわる記述 (4名)
- ・「資料の人物のすばらしさ」にかかわる記述 (4名)
- ・『『美しさ』がわかった』という記述 (1名)

上記の感想の中から「自己を見つめた姿」にかかわる記述が見られた生徒感想を以下に載せる。(原文のまま)

※下線部は研究員による表記

- a 自分は、今日の授業で人は人を感動させることができ、また、頑張った時程、人に与える感動が大きいことに気がきました。そして、その感動という気持ちは凄く純粋で綺麗なものなんだろうなと思いました。自分は、その感動という気持ちを人に与え、そして与えられるような人になりたいと思いました。
- b 今日の学習をとおして気づいたことは、一生懸命に何かをとりくめば、人に感動を与えることができるんだということに気づいた。
- c (気づいたこと、考えたことは、)星野さんの詩画や合唱は、周りの人と協力しないと成り立たない事。
団結することによって、美しいものが生まれるという事。

【考察②】

1年1組では、授業のまとめまで行うことができず、生徒の十分な心情を育むことができなかった。後日、その反省を生かして1年3組で実施し直した。その感想に自己と照らし合わせる内容が見られたことから、自己をみつめる道徳の授業が展開できたのではないかと考える。

aの感想の「自分は、今日の授業で人は人を感動させることができ、また、頑張った時ほど、人に与える感動が大きいことに気づきました。」からは、自己を見つめた姿が受け取れる。合唱コンクールを見ての保護者や先生方からの手紙による賞賛は、合唱の取り組みの成果として得られたものであるととらえたことが分かる。だから、このaの声から「頑張った自分」は「人に感動を与えた」のだと合唱の体験を昇華できたと推測する。bもaと同様に「人を感動させることができる」と自己の能力をとらえている。

また、cの感想は、資料主人公と自分達の合唱を「周りの人と協力しないとどちらも成り立たない」とつなげている。その上で、周りの人と協力し団結することによって、資料主人公の絵も自分達の合唱も「美しいものが生まれる」ととらえている。このことから、cは授業を通して「合唱」の体験のとらえ直しをすることができたと考える。

このように、a～cの感想から自己をみつめる道徳の授業ができたのではないかと考えた。あわせてこれらの感想からは、具体仮説の「自己効力感」が読み取れた。aの感想の「人に感動を与えられるような人になりたい」という内容は、自分がその能力を持ちたいととらえられ自己効力感がうかがえる。

また、bの「一生懸命に何かに取り組めば、人に感動を与えることができるんだ」も、自己効力感の確信にはいたっていないが、自分の能力を高めることにかかわる言葉ととらえることができた。cの「協力すること」は協力する力、「団結すること」は団結する力ととらえられ、自己効力感にかかわる言葉ととらえた。

(2) 仮説の検証

【具体仮説(1)の考察】

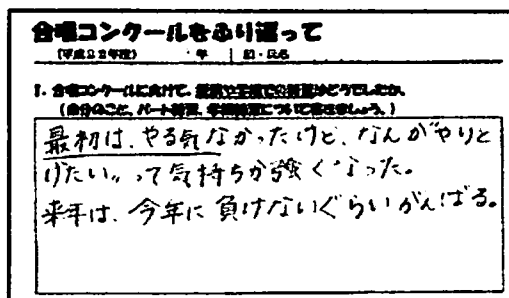


図3 女生徒の合唱後の感想①

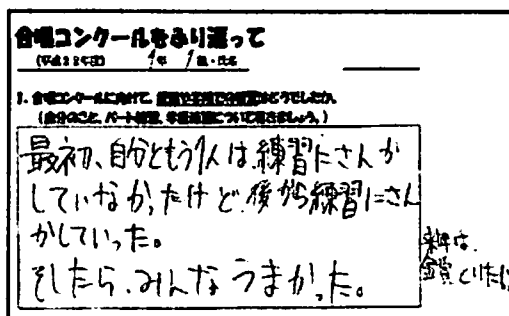


図4 女生徒の合唱後の感想②

考察は、「生徒の変容した姿」と感想における「自己効力感」の分析の二つで検証する。

最初に「生徒の変容していった姿」である。

総合単元化によって、やる気の高まった生徒の様子が、図3の反応から見えてくる。この感想は、コンクール後の音楽の授業で書かれたものだが、「やりとげたいという気持ちの高まり」は意識をつないでいくと、単元化したことにかかわるものと考えられる。

また、図4の生徒の反応は、当初、学級からはずれがちであったが、最後の練習には周りの生徒から「歌おう」と声をかけられてうれしそうに練習に参加している様子がうかがえる。本番はしっかり歌ったとも別のシートには書いていた。このように、特に女生徒に変容の見られた生徒が多くなったが、女生徒は取り組み途中で意見の対立があり、仲直りしたことから、きっかけを得たこともあり、より真剣に歌うようになったと考える。

図5の音楽科の先生のコメントには、「学校一声の小さな」「団結できない女生徒たち」とあったが、写真2

・3のようにコンクール当日、直前の練習ではアルトとソプラノが向かい合って歌えるまでになった。

その結果、教師や保護者からの学級への励ましの手紙には「感動した」という内容が多くなった。道徳2の授業後、丁寧にその手紙の掲示物を作った(写真4)のは、図3の感想を述べた女生徒である。「思いを込めて掲示物を作った」と本人が話していたことから、合唱コンクールが大切なものとなったことがわかる。この女生徒は、毎週、道徳の授業を楽しみにするようになり、その後の道徳の授業での感想も授業ごとのねらいをとらえる内容に変容した。

一方で、男生徒は当日の直前の練習になってもふざけたりする生徒がいて、女生徒と比較すると心情面での高まりは低かったといえるだろう。

今回の総合単元化では「道徳教育の目標を達成するために指導すべき4つの視点」の中の2や4を取り上げておらず、男女間の協力や学級の団結等の面の取り組みが弱かったといえるだろう。視点1と3を含めながら、内容項目をどのような順序で配列すれば効果的なのかを検討し直すことは、今後の課題として挙げられる。



写真2 「会場駐車場で歌の練習をする女子」



写真3 「向かい合って歌う女子」



写真4 丁寧に作った手紙の掲示物

練習始めは学校一声の小さい女子と書かれている。

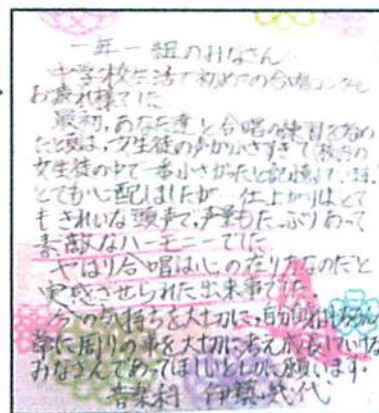


図5 音楽の先生の手紙

次に、実践事例1と実践事例2の道徳授業の感想から、「自己効力感」の芽生えを感じさせる内容がでてきたこと(【考察①】、【考察②】)から、自己効力感を高めることを意図した授業を展開することは可能だと考える。「自己をみつめる」指導を行うことで、自己効力感が芽生え、社会的自尊感情が高まるとした仮説に一定の効果があったと考える。

3 具体仮説(2)の検証

「生命尊重」にかかわる総合単元的な道德学習を構想し、「いのちを考える」指導を行うことで、自己肯定感・自己受容感が芽生え、基本的自尊感情が高まるであろう。

(1) 検証授業の実施

実践事例③「道德」の授業実践3 [1月11日(火) 2校時実施]

ア 主題名 「精一杯生きよう！」 内容項目3- (1)

イ 資料名 「明日もまた生きていこう あとがき」(横山友美佳 マガジンハウス)
You Tube 「The History of YUMiKA & KAOR (木村沙織—横山友美佳)」
You Tube 「木村沙織 北京五輪決定インタビュー」

ウ 本時の学習

・ 本時のねらい

資料中の主人公のがんと闘い精一杯生きる姿を知ることと自己の生き方を見つめることを通して、自分の命を精一杯生きようという心情を育てる。

・ 授業仮説

展開後段で自分が精一杯生きているかを考える活動を通して、自己の精一杯生きた体験と級友の体験を交流することで、生きる姿勢を見つめ直し、自分の命を精一杯生きたいという心情を育てることができよう。

エ 生徒の感想・・・キーワードで分類した。

(精一杯生きるにかかわる記述があるか)

- ・「精一杯生きていきたい」にかかわる記述(12名)
- ・「命を大切にしたい」にかかわる記述(9名)
- ・「夢を持つことの大切さ」にかかわる記述(8名)
- ・「友達を大切にしたい」にかかわる記述(6名)

その中から、2名の生徒の感想を以下に記載する。(原文のまま)

※下線部は研究員による表記

a とにかく今、生きていることを大事にしていくこと。

ガンなのにこんなに生きることも大変なのに大学へ行くなんてすごいと思いました。僕も夢を決めてがんばりたい。

b バレー生活から闘病生活にかわって、きついのはいっしょだけど、その時の夢があって自分も勇気づけられたし、同じスポーツをやってる事としてこれからもバレーをつけていきたいと思った。

これから、今という瞬間を大事に生きたいです。(バレー部の女子の感想)

【考察③】

命の有限性(死)を取り上げて授業を実施した。ここでは、「いのちを考える」指導を行うことから自己受容感が芽生えたかを考察したい。理論研究の中で、自己受容感とは、「自分や今ここでの体験をありのままに意識化し、概念化して受け入れる態度や感情」と定義した。それを本時に置き換えると、「授業を通して資料中の主人公の死を追体験し、それをありのまま意識化し、死の概念を受け入れる態度や感情が芽生えたか」となる。

生徒の感想から検証していくと、aの感想に「ガンなのにこんなに生きることも大変なのに」と「死」を意識してとらえている内容が見られた。また、aは「とにかく今、生きていることを大事にしていくこと」とも述べている。これは、「人は死ぬ」ことを受け止めたうえで、「生」という概念を再認識し、「精一杯生きる」と感想をまとめたものと推測した。このaの感想は「精一杯生きる」にかかわる感想と分類した。bの感想も同様の分類である。

また、「命の大切さ」を感じた感想は、「死」を受け止めた結果、「命の大切さ」に気づくという点で、これらの感想も「死の概念を受け入れた」ととらえることにした。

aのような「精一杯生きる」にかかわる感想を述べた生徒が12名、また、「命の大切さ」を感じた生徒が9名いたことから、両者をあわせて、全体の36%（12名）が、死の概念を受け止めた上で感想を述べたことになる。これらの生徒は、資料の主人公のメッセージを受け取り、「精一杯生きる」ということを考え、感想をまとめていたことから、自己受容感の芽生えを促すことができたと考える。

また、一見「精一杯生きる」とはかかわらないように映る感想が出てきた。「夢を持つことの大切さ（8名）」や「友達を大切にしたい（6名）」にかかわる記述である。

しかし、分析的にみても、これは、ねらった内容項目「精一杯生きる」とかかわりが深いと考える。友の思いを支えに「精一杯生きる」こともあるし、「夢を持つ」ことが「精一杯生きる」ことの原動力となったりする。資料の主人公がそうであったことから、間接的には内容項目とかかわると考察した。

実践事例④「道徳」の授業実践4 [1月31日（月）5校時実施]

ア 主題名 「命の大切さを感じとる！」 内容項目3-（1）

イ 資料名 「おへそのあな」（長谷川義史 BL出版）

「いのちってスゴイ！赤ちゃんの誕生」（大葉ナナコ 日本誕生学協会）

ウ 本時の学習

・本時のねらい

自分は愛されて生まれ、今も愛され続け生きている存在だという実感を持たせ、自分の命を大切に生きようという心情を育てる。

・授業仮説

展開後段で保護者からの手紙を読むことを通して、自分が愛されていることを実感し、自分の命を大切に生きようという心情を育てることができるであろう。

エ 生徒の感想・・・キーワードで分類した。

（「自分の命をどう生きたい」という心情にかかわる記述があるか）

- ・「自分の命をどう生きたい」にかかわる記述（8名）
- ・「保護者から手紙をもらい驚いた」等の手紙にかかわる記述（7名）
- ・「赤ちゃんは大切に育てなければいけない」にかかわる記述（5名）
- ・「自分は愛されているんだ」と実感したことにかかわる記述（4名）
- ・「家族を大切にしたい」にかかわる記述（3名）

上記の感想の中から、自己肯定感（「自分は愛されているんだ」にかかわる記述）が見られた生徒感想を以下に載せる。（原文のまま）

※下線部は研究員による表記

a これまでの自分は、どんなふうにもまれたか興味なかったけど、これからの自分は、自分が生まれる前のことを興味持つ。

今日の授業で、赤ちゃんは、愛されなければ死んでしまうことがわかった。

いままで自分が愛されていたということをあらためて知った。愛されてなかったら死んでいたかもしれないのでよかった。

b これまでの自分は自分がきらいでいやだった。姉とくらべられるし、ひいきはされるし、そのたびに自分がきらいだった。

これからの自分は、自分を好きになれるようになって、優しい人になりたい。

今日の授業でおやの大事さをした？いつも笑いだったけど、泣いてはしまうし、

・・・言葉にできません。

【考察④】

ここでは、「いのちを考える」指導を行うことから自己肯定感が芽生えたかを考察する。理論研究の中で、自己肯定感とは、「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」と定義している。

では、生徒の感想から自己肯定感をとらえると「いままで自分が愛されていたということであらためて知った。」という内容がつながる。自己に対して前向きで、好ましい部分が「愛された」という反応と受け取れる。

この生徒は一人っ子だが、授業の中で紹介した「抱っこしたりあやされたりしない子どもは1歳になる前にみんな死んでしまった」という授業資料の中のローマの王様の実験の結果を受けて、「愛されていなかったら死んでいたかもしれないのでよかった。」と、今、自分が生きることがそのまま愛された証だと受け止めた感想をまとめている。

また、bは、双子の生徒の感想である。常に姉と比較されることで、「自分がきらいだった」が、母親の手紙を読むことで、あらためて「親の大事さ」を知る授業となったことが感想からうかがえる。bは授業の中で母親からの手紙を読みながら涙を流していたが、本人なりに悩んでいたことを感想に述べたうえで、「これからは、自分を好きになり、優しい人になりたい」と肯定的な感情がうまれている。授業を通して自己に対して前向きな感情を抱くことができた様子を読み取れる。

さらに、今回の道徳授業は、命の誕生の資料から授業を行ったが、前回の死の授業とあわせて「生と死」が分かったと感想をまとめた男生徒がいた。授業をつなげたり、比較してとらえたりする視点を持つ生徒ができたことに驚いたと同時に、生徒の思考が深くなっていることに気づいた。

しかし、「自分は愛されているんだ」にかかわる記述が4名と比較的少ないため、自己肯定感に直接かかわる授業ととらえることに弱さを感じる。

なぜそうなったかを分析的にみると、保護者からの手紙を授業の終末に渡したことによるものと考えられる。手紙に驚いたあまり、感想の内容が「手紙」にかかわることに終始した生徒が7名いた。前段とつなげなくなっている生徒たちであった。そのため、展開前段とつなぐことで自己肯定感が芽生える構成が生かせず、手紙を受け取った「驚き」によって前段の内容が薄れてしまったことにより、感想に直接、自己肯定感を表す表現は見いだせなかった。授業の中で、最も生徒が集中した場面は親からの手紙の場面で、生徒の手紙を読む様子や態度からは喜びの姿が見られたことと授業の感想がつけなかったことは課題の一つである。

つまり、「手紙」が効果的なbのような生徒と、授業の振り返りが進まない生徒ができたことは、自尊感情を高めるという視点では、とらえにくい結果になった。

(2) 仮説の検証

【具体仮説(2)の考察】

授業実践3から自己受容感の芽生えを、授業実践4からは自己肯定感の芽生えを追った。授業実践3では、【考察③】にあるように、約3分の1の生徒に自己受容感にかかわる授業感想が見られた。

また、授業実践4では、「自分は愛されているんだ」と実感したことにかかわる記述が4名いた。これはそのまま自己肯定感につながる表現だが、4名の生徒の心情は基本的自尊感情が高まることにつながると思う。また、授業の感想が「手紙」中心になった生徒も自己肯定感の高まりは期待できると考えた。なぜなら、「手紙」から保護者の愛情を感じ取ることができたと考えられ、自己に対しての好ましい感情は間接的に芽生えたととらえたからである。

これらの結果から、授業実践4の中で、あわせて11名の生徒の記述(全体の33%)が基本的自尊感情を支えたのではないかと推測する。

両授業とも約3割の生徒が、自己受容感・自己肯定感が芽生えたことから、基本的自尊感情の高まりに、「いのちを考える」指導を行うことは有効であると考え。

では、残りの3分の2の生徒は自尊感情の高まりが見えてこないことに課題が残る。近藤(2009)は、『いのちの教育』とは、人の一生のあらゆる営みと出会いを含む、総合的な教育である」と定義している。それならば、意図的な授業をし、そこで書かれた感想は大部分が何らかの形で「いのちの教育」にかかわるものとなるのかもしれないと考えるためである。何度も授業を重ね、時間をかけて子どもの変容を追っていくことで、基本的自尊感情の育ちは見えてくると考える。

そのため今回の授業実践では、「基本的自尊感情を支える」生徒の感想がどの範囲を指すのか見極める基準を見いだすことに課題が残ったといえる。

VII 研究の成果、課題、対応策

1 成果

- ・自尊感情を二領域からとらえ、それにもとづいて総合単元化を図り、道徳学習を展開することができた。
- ・学校行事「合唱コンクール」を中心とした総合単元的な道徳学習を行うことで、「自己をみつめる」感想が見られたことから自己効力感の芽生えを促す取り組みができた。
- ・「生命尊重」にかかわる総合単元的な道徳学習の感想に、自己肯定感・自己受容感にかかわる内容が見られたことは、基本的自尊感情を高めることにつながると考える。
- ・副次的な成果として、道徳の検証授業を計画的に実施していくなかで、真剣に考える様子が見えてきて、授業を受ける構えがよい方向に変容してきた。(P19の資料より)

2 課題

- ・自尊感情を高めるための単元構成のあり方を実践の中から見極めていくこと
- ・自尊感情の高まりを効果的に測定する方法を試行していくこと
- ・思春期の生徒に授業の中でどのように言語表現させるか、その表現をひろいどうつなげるか等の指導技術の向上と生徒の考えを広げる発問の工夫

3 対応策

- ・総合単元化した道徳学習の年間指導計画への効果的な位置づけ
- ・道徳研究の検証の方法を見極めていくこと
- ・週1時間の道徳の授業を計画的に実施し、さらに充実させること



写真5 グループ学習する生徒



写真6 感想を書く生徒



写真7 自分の意見の発表に慣れてきた生徒



写真8 保護者からの手紙を読む生徒

※「副次的な成果」の資料として（生徒アンケートより）

表1 これまでの道徳と今年の道徳の違いを書いてください。

- ・ビデオを見ながら、今年は多かった。
- ・グループ学習が多い。（グループで話したり、考えたりすることが多い）
- ・親も一緒に道徳の授業をしている。（手紙とか）
- ・今年の方が自分の考えを書くことが多い。
- ・人の心が伝わってくるところが小学校と違う。
- ・より深く心の勉強をする。
- ・人の命など健康などについて考えさせられた。
- ・今までは道徳というより総合みたいで、あまり頭に残らなかった。でも、中学生になってから、美奈子先生になってから、命について考えることが多くて、とても心に残っている。
- ・難しくなった感じがしている。
- ・考えることがたくさんある。（深く考える所がちがう。）
- ・楽しくなった。・おもしろくなった。
- ・これまでの道徳は意味が分からなかったけど、今年の道徳は分かるようになった。

主な参考文献

- 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 平成20年
『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』
文部科学省 平成20年 中学校学習指導要領
文部科学省 平成20年 中学校学習指導要領解説 道徳編 特別活動編 国語編
近藤卓著 2010 『自尊感情と共有体験の心理学』 金子書房
押谷由夫著 1995 『総合単元的道徳学習論の提唱—構想と展開』 文溪堂
押谷由夫監修／岡山県小学校道徳教育研究会著 1996『子どもとつくる総合単元的な道徳学習』
東洋館出版社
- 笹田博之著 1995 『総合単元的道徳学習の実践』 明治図書
近藤卓著 2007 『いのちの教育の理論と実践』 金子書房
近藤卓著 2009 『いのちの教育の考え方と実際』 至文堂
田中道弘著 2011 自己肯定感 榎本博明(編) 2011 自己心理学の最先端:自己の構造と機能を科学する あいり出版 pp.129-140.
- 永田繁雄著 2006 『「じぶん」「いのち」「なかま」を見つめる道徳授業』 教育出版
梶田叡一著 1994 『自己意識心理学への招待』 有斐閣ブックス
金政祐司／石森真徳著 2006 『わたしから社会へ広がる心理学』 北樹出版
辰野千寿(他3名)編 1986 『教育心理学事典』 教育出版
坂野雄二編 2000 『臨床心理学キーワード』 有斐閣
貝塚茂樹著 2009 『道徳教育の教科書』 学術出版会

田中道弘 様

この度は、私の研究論文に田中先生の文献記載が入っておらず、剽窃というかたちになってしまったことを深くお詫び申し上げます。私の著作権への認識不足で大変ご迷惑お掛けいたしましたことを深くお詫び申し上げます。

今後も、ご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

友寄 美奈子

田中道弘 様

この度は、本研究所の研究教員が貴殿の論文を剽窃し、また電子媒体として掲載していたことを深くお詫びいたします。

10年以上かけての研究を正当な手続きをとらずに利用したことで、貴殿には多大なる迷惑をかけたことを深く反省し、すでに発信しました原稿の差し替えと、再発を防ぐための指導と原稿校正の徹底をもちまして、謝罪とさせていただきたいと思っております。

うるま市立教育研究所